

そのテレビニュースを松野水産協会は釈然としない思いで見ている。仙台市で居酒屋を営む。地元魚を売りにしている。ニュースはホヤの水揚げを伝っていた。夏が旬の海の珍味。朝取りのホヤが港に揚がり、ラックの荷台に積み込まれ、いつもの出荷風景と変わらぬ。そこまでは。

車は市場に向かわない。廃棄物処理場への道をたどる。

三陸沖は養殖ホヤの日本一の地と知られる。宮城県の生産は全国の4分の3を占める。平成23年の東日本大震災で養殖施設が全滅したが、その年のうち修復し、養殖を再開した。上得意は韓国だ。生をコチュヤンと酢に付けて食べる食文化が定着している。消費量は日国内消費を大きく上回り、産量の7割は韓国への輸出がある。

その最大消費国が25年、禁輸断行した。

理由は東京電力福島第1原発事故だ。海洋汚染を気にし、原立地県の福島のほか、宮城など日本列島の太平洋側7県のホヤを含む全水産物の輸入禁止に踏み切った。

宮城県のホヤ漁師は震災前と変わらぬ韓国の消費を見込み、米と同じ事業規模で走り出していた。大口の販路が断たれ、ホヤは「在庫」を抱え込む。ホヤは4年で食べ頃を迎え、収穫期を過ぎても海の中にたらかししておくと、腐り、生育環境を台無しにする。水産協会は国内消費を除く全廃棄を決めた。冷凍庫で一保管し、焼却処分する。

■ ■ ■

昨年の宮城県の生産量は1万7000トン。このうちの6割に7600トンが一般廃棄物と処理場に姿を消した。丹精込めて育てたホヤは子然。廃棄は断腸の思いだ。テレビ画面は苦渋に満ちた漁師の顔を映し出す。

中を察する。生産者として許せない思いなのだ。だが、船に落ちない。漁師はのどに魚の小骨が刺さるような違和感を覚えた。十分に伴う損失は東電が全額

雄勝湾でホヤの水揚げ作業を行う(左から)松野水産協会の伊藤浩光さん、木村達男さん

11月6日午前、宮城県石巻市(納富康撮影)

補償する。漁協を通じて買い取り利用者が負担する。漁師の収入は確保される仕組みだ。漁師も現実的には傷をされ、懐は痛まない。漁協と負っていない。その2者が話を交わしてはかかって震災前より手数料ついで、大量廃棄を決める。そこ収入が増えた。東電も補償財源に消費者の入り込む余地はない。電気料金に転嫁し、最終的に

韓国禁輸 東電が買い取り

「宮城の味」を消費者に

ホヤは人によつて好み分かるとして大きな声になりにくい。好きな人は「甘みと独特の苦みがたまらない」と夢中になり、苦手な人は「それが駄目」とそっぽを向く。

熱烈なファンがいる反面、支持層は広がらない。

そのせいで愛好家が「消費者不在」と声高に叫んでも、全体

「お客さんの口に届きたい」松野は思いを強くする。伊藤浩光(66)も現状を嘆いて

宮城県石巻市の雄勝湾でホヤを売っている。全て消費者向けに出している。廃棄に回さない。独自に販路を開拓し、軌道に乗せた。ホヤの店にも卸している。

韓国の禁輸は長引くと踏んでいる。国内世論調査で8割を占める人が輸入禁止を支持している。情緒法「憲法より上位に」と聞く。政府が民意に反し、禁輸を解くとは思えない。

一方、東電の補償はいつまで続くか分からない。現に縮小傾向はもう始まっている。漁師も営業努力して地力を蓄えたいと、補償打ち切りになったら打ちまち上がる。

「ホヤも人に食べてもらいたくない」

伊藤は前を向く。

木村達男(66)も憂えている。仙台市でホヤ加工業を営む。ホヤ好きが高じ、脱サラして起業した。「ホヤおやじ」の異名を持つ。メニュー開発で松野の店に協力している。

廃棄ホヤの東電の買い取り価格は1キロ152円。震災前の韓国への輸出価格を基準にしている。

国内消費の市場価格は1キロ120円前後だ。人の口に入るより、捨てる方が高い。差額も補償対象になるとはいえ、の逆転現象が廃棄を誘っている。本来、価格を決定付ける市場価格が脇に追いやられている不条理を感じる。

「ホヤの食文化の主役の座を消費者の手に取り戻したい」木村は願う。



7月初旬。雄勝湾に3人が顔をそろえた。船を出す。抜ける靑空。穏やかな海。漁場に着く。4年間海に垂らしたロープを引き揚げる。水をしたたらせ、赤い房が揚がる。どれも丸々太っている。「海のバイナッブル」の呼び名にふさわしい。

船の上で殻をむいて口に運ぶ。

甘い。苦みもない。磯の香りが鼻に抜ける。

これが。それぞれの思いが間違っていないことを再認識する。ホヤを消費者へ。

願いは形になった。宮城初。国内一の産地で初めてなら日本第1号と言っている。

きのう20日。伊藤が取って木村が監修して松野が提供するホヤの専門料理店がJR仙台駅前オープンした。

(東北特派員 伊藤寿行)